如風的馬淵是東洋第一

風のような「馬淵」は「東」洋第「一」

바람 같은 마부찌, 동양제일이다.

The Wind-Like Mabuchi Toichi was the First in the Orient

文｜林修澈（政治大學民族學系教授暨原住民族研究中心主任）
圖｜馬渕悟（日本東海大學國際文化部教授）

出身像神話 生平像傳奇

他的出身像神話。說他是哪裡人？並不容易說清楚。從家族世居地來說，是鹿兒島縣，離台灣很近的九州南部。但是從他個人出生地來說，是千葉縣，產生「里見八犬傳」的土地。可是這個出生地並不能跟童年跟少年連結在一起，他的成長地是東京，東京培育他一生恣意而行的風格。說他是哪裡人？他的出身像神話。

生平像傳奇。他考上東京帝國大學經濟系，卻捨棄不讀，遠行南渡到台北，只為追隨移川子之藏教授。在移川主持的民俗學與民族學的講座內只有三人：教授移川子之藏、助手宮本延人、學生馬淵東一。講座雖小，威力卻大。總長支持它，總督資助它。透過第11任總督上山滿之進的資金寄贈，三人合作展開《台灣高砂族系統所屬之研究》，這

沖繩調查1960年代。
沖縄調査1960年代。

神話的な出身、伝奇的な生涯

彼の出身は神話のようである。彼はどこの人か？と言われても、はっきりと答えることはできない。父祖は台湾から近い九州南部の鹿児島県に住んでいたが、彼の生まれた地は「里見八犬伝」発祥の地・千葉県である。ただしこの地を幼年時代、少年時代と結びつけることもできない。思うように生きるという彼のスタイルは東京で培われた。彼はどこの人か？その出身は神話のようである。

そして彼の生涯は伝奇のようである。彼は東京帝国大学の経済学科に合格したがそれを放棄し、移川子之蔵教授に師事するためだけに遠い南の地・台北に渡った。土俗人種学講座には教授の移川子之蔵、助手の宮本延人、そして学生の馬淵東一の3人しかおらず、小さな講座では

馬淵東一（1909-1988，79歲），
民族學人類學名家。
馬淵東一（1909-1988、79歲）、
民族学人類学の大家。

政大原住民族研究中心

雅美族紅頭社幼童與擔任教學工作的馬淵東一先生。 （台灣大學人類學系系藏）
ヤミ族イモロッド社の子どもと教師をしていた馬淵東一氏。

個研究計畫，在他大學畢業後展開，他成為撰寫主力，承擔七成的工作，該書在四年後出版（1935，26歲）。研究工作到1943，他出任仝大學助教授（34歲）。然後隨著戰爭局勢擴大之便，轉往南洋，他尋找台灣原住民族與東南亞及太平洋的連結。

愛煙愛酒愛研究 不愛教學

戰後，歷任東洋大學、東京都立大學、琉球大學、南山大學等校教授。他醉心研究沖繩的Onari神信仰（姊妹神信仰），琉球大學正是田野所在地的大學。至於東京都立大學與南山大學，則是日本少數幾個有人類學科系的大學。不過，他對於教學的興致不高，樂趣不濃。他愛煙愛酒愛研究，始終不替。一生著作結集為《馬淵東一著作集》（1974）。門生多

あったが威力は大きかった。総長の支持と、総督の出資があったからである。第11代総督・上山満之進による資金の寄贈と3人の協力によって『台湾高砂族系統所属の研究』が進められた。この研究計画は彼が大学を卒業した後に進められ、彼が執筆の主力となって7割を負担し、4年後（1935、26歲）に出版された。研究は1943年まで続けられ、彼は同大学の助教授となった（34歲）。その後、戦局拡大の都合により南洋に転任となり、台湾原住民族と東南アジア及び太平洋のつながりを模索した。

政大原住民族研究中心

活躍於日本學界，現今的原住民研究領域，除去幾位故舊，多數出其門下。台灣的學脈是隨著戰後遣返而嘎然中斷，再重新接枝。對於學問傳承自然是一大斫傷，幸好原住民研究仍然持續，於是他的論著仍然發揮相當的影響力。九十年代以來台灣的原住民族史興起，更是契合他的研究風格，影響力的增強，不言可喻。

他可以說是為台灣而生，在台灣生活16年，然後把台灣帶回日本養在研究室裡。可是他不是「灣生（註1）」，生或不由己，而死卻可以自己抉擇，他把骨灰悄悄埋在台灣，成為「灣埋」。侄孫等松春夫在童年就聽叔公說酒話，將來墓碑上要刻「馬耳東風」四字，好奇不肯忘，年到半百，不遠千里，親眼目睹，終於相信。◆

註1：灣生，指出生地是台灣的日本人。

馬淵東一與宮本延人（1987）。
馬渕東一・宮本延人（1987）。

酒とタバコと研究を好み、教職を好まず

戦後は東洋大学、東京都立大学、琉球大学、南山大学などに歴任した。彼は沖縄のオナリ神信仰に熱中した。琉球大学はちょうどフィールドワーク先の大学であり、東京都立大学、南山大学は日本でも数少ない人類学科のある大学である。しかし、彼は教職にはそれほど興味を示さず、酒とタバコと研究を愛する姿勢は生涯変わらなかった。そしてそのライフワークは『馬淵東一著作集』（1974）にまとめられている。彼の門下生たちは日本の学界で大いに活躍し、数人の旧知を除いた多くの学者が彼の教えを受けている。台湾での研究の脈絡は戦後の引き揚げにより突然中断し、枝接ぎされた。これは学問の継承にとっては大きな痛手であるが、幸い原住民研究は続けられ、彼の論文や著作は依然としてかなりの影響力を発揮している。90年代以降、台湾の原住民族史の隆盛は、彼の研究スタイルによりいっそう合致しており、影響力がさらに強まっているのは言うまでもない。

彼は台湾のために生まれたと言えるだろう。台湾で16年間生活し、その後、日本に帰って研究室の中で台湾のイメージを充満させた。彼は「湾生（注1）」ではない。しかし生まれは自分で選ぶことはできなくても、死は選ぶことができる。彼は遺骨をこっそり台湾に埋め、「湾埋」になった。大甥の等松春夫氏は少年時代に、大叔父が酒を飲みながら自分の墓には「馬耳東風」の4文字を刻んでほしいと言っていたのを聞き、面白さのあまりそれを忘れることができず、壮年にいたり千里の道を厭わず自分の目で確かめて、ようやく信じることができたとのことである。◆

註1：「湾生」とは台湾生まれの日本人を指す。

政大原住民族研究中心